

2017年10月1日<聖霊降臨後第17主日 礼拝>飯川雅孝 牧師

招詞: 使徒言行録4章32-37節 聖書: 申命記26章5b-11節 サムエル記上8章7-18節

説教: 『土地の日を考える』

1. 問題提起

10月1日の今日は「土地の日」、漢字の十の下に一を付ければ、土になります。

さて、1980年代半ばから壮絶な土地バブルの時代があり、わたしたちも子育て時代に入って住宅事情を考えなければならない時でしたから土地の値上がりあおられました。9月22日の朝日新聞の『天声人語』によれば、その少し前に作家の司馬遼太郎は「日本では土地というものが山間僻地（へきち）にいたるまで投機の対象になって、お互いに寸刻みにした土地をつかみ合っては投げ合っているから公有にして管理しなければならない。」と警告していました。その千里眼に驚きます。しかし、最近を持ち主が誰か分からない土地が、九州の面積を超えている。専門家の吉原祥子氏によれば、「人口が減少したため、死亡者に課税するようなおかしい問題が出てきた。」土地は高くて手が出ないと思っていた感覚が狐につままれたような気持ちにさせられます。この流れを見ますと、富への人間の欲望が露出していることがはっきりします。国土交通省では現在の問題を受けて、適切に土地を使いましょうと訴え始めています。これからの法律改正がどのようになるか見て行きたいと思います。

2. フランスの18世紀啓蒙思想家のジャン・ジャック・ルソーの『人間不平等起源論』

土地と言えばあの有名なフランスの18世紀啓蒙思想家のジャン・ジャック・ルソーの『人間不平等起源論』を意識せざるを得ません。高校時代の社会科の教科書にある「アダムとイヴの時代に誰が地主であったか。」という冒頭の言葉を印象深く覚えています。ルソーはイギリスの思想家ジョン・ロックの「私有のないところに不正はありえないだろう」に啓発されます。ルソー自身は6歳の時母親が死に、時計職人の父親と多くの本を読みましたが、その父親も彼が10歳の時決闘沙汰で逃亡してしまい、人に生活を見てもらうような恵まれない境遇に生きます。また、私生活もほめたものではありません。しかし、物事への理解力は優れていますし、人を惹きつける力はあったようです。そうした中で、当時の絶対王政の権力構造の下、生い立ちへのひがみもあって、なりふり構わず政治と社会のあり方を辛辣に批判せざるを得なかったのでしょう。それは本質を付いています。「土地の私有権の主張は多くの犯罪と戦争と殺人をもたらす。なぜなら、土地の産物は人間にあらゆる必要な援助を提供する。本来の人間の姿は自然から与えられた環境で自足的に生きている時は、心に汚れの無い精神の持ち主であり、平等で争いのない自然状態であった。農業を始め土地を耕し家畜を飼い文明化していくと、生産物が多くなって、やがて不平等の原因となる富が作り出され、富をめぐってしだいに競い合いながら不正と争いを引き起こして行く。そのため、社会で生活するためにはお互いに規則を設けて行動を規制しなければならない。政治的な規制から社会的な規制に進み人々はますます社会制度に縛りつけられる。」と批判します。次の『エミ

ール』『社会契約論』を出版すると彼は一層、権力からにらまれ逃避行を余儀なくされます。

3. 聖書では本来、土地をどのように考えているか。

創世記では神は、土（アダマ）の塵で人（アダム）を造ったと言います。そして、神はこの人間に大地を支配させる。他方、大地を耕かせ、仕えさせる。人間と土地の結びつきは強い。しかし、命の木の実を食べて、エデンの園を追われた人間には神に背くという根本にある罪の問題を抱えております。だからカインとアベルの問題は土が作物を生み出すことはなく、ノアの洪水に見られるように罪を犯し、大地と人は呪われ裁きを受けます。それを神は赦し、祝福されます。

その後、神は祝福のしるしとして、アブラハムを人類の祖先として送り出します。このアブラハムに続く、イサク、ヤコブは放浪の旅をします。彼らは危険な旅を続けますが今日の聖書、申命記はその喜びを告白しています。「わたしの先祖は、滅びゆく一アラム人でありました。エジプトに下って奴隷にされましたが、奇跡をもって救われ、乳と蜜の流れるこのカナンの土地に導き入れられました。ですから、感謝のしるしとして、地の実りの初物を、今、ここに持って参りました。」土地はイスラエルの民にとっては神の祝福のしるしでした。土地から得られる産物は神に喜ばれるように用いられることが求められました。イスラエルの民は初めは山岳地に入植し羊を飼う放牧によって生活し、その後農地に入ります。ダビデ王も元は羊飼いでした。その山岳地帯では、鉄は作れないから生産力もない。全員貧乏でしたし、身分もなく平等でした。

4. サムエルの王政への警告をルソーの考え方によって検証してみましょう。

ルソーの考え方は社会科学の学問としては妥当と考えます。ルソーは当時のフランス絶対王政の下における実態が、サムエルが民に、王制になればあなた方は奴隷のような状態に置かれると言った言葉通りであったことを言っております。

初めての王、ダビデの前の王サウルを任命する時、指導者サムエルと民の間に争いがありました。それが今日の聖書サムエル記上です。この頃、民は農耕生活に移って行き次第に裕福になって行きます。民は周辺国と対抗するため、国を治める王を要求します。それに対してサムエルは言い返します。「王はあなたたちの息子を戦争に駆り出し、耕作や刈り入れに従事させ、武器や戦車の用具を造らせる。娘を、香料作り、料理女、パン焼き女にする。最上の畑、ぶどう畑、オリーブ畑を取り上げ家来に分け与える。税金を取り、払えない者は奴隷にする。王を選んだ結果、あなた方は泣き叫ぶ。」しかし、サムエルは民の要求を飲みます。ダビデが王になると周辺の国家を征服し、農耕地もほとんど奪ってしまいます。イスラエルの国は放牧から農耕の裕福な国に生まれ変わります。そして、その後は他の人を征服しようとする根元的な罪が王国の形成によって進み、貧富の格差と民の退廃を生み出します。預言者アモスはそれを糾弾しています。「わたしは決して赦さない。富んだ者が、正しい者を金で 貧しい者を靴一足の値で売ったからだ。彼らは弱い者の頭を地の塵に踏みつけ 悩

む者の道を曲げている。父も子も同じ女のもとに通い わたしの聖なる名を汚している。祭壇のあるところではどこでも その傍らに質にとった衣を広げ 科料（かりょう）として取り立てたぶどう酒を 神殿の中で飲んでいる。（アモス2：6b-8）」と。

イスラエルは神を忘れ傲慢になり、国全体の信仰の退廃が進む。だから、その審判としてバビロン捕囚の憂き目に遭ったのです。ルソーの考えはさらに、国をまたがります。

民はバビロンから帰国しても、その後も大国に圧迫されます。だから、不平等は大国と小国イスラエルの間で大きくなり、弱いイスラエルは反発して戦争に訴えますが、結果的には敗北して一層惨めな状態におかれたのであります。このように虐げられる中で、イスラエルの民は救い主（メシア）を待望する思想が生まれたのであります。しかも、この弱いイスラエルの民の中で、祭司階級を中心とする少数の指導者階級と多数の貧しい階級の不平等は大きかったのです。救い主イエス・キリストは地上におられる時、この貧しい人々の中に入っ

5. イエス・キリストによる神の国

今日の招詞が告げることはペンテコステの後、聖霊を受けた人たちによってエルサレムに最初の教会が生まれます。ところが、その教会に集まったキリスト教徒たちは働くすべもなく、本当は貧しい人たちが多かった。それにもかかわらず、信者の中には、一人も貧しい人がいなかった、と矛盾していることを言っています。つまり、教会に集うひとたちが心を一つにして助け合い、持てる人が土地や家を売って代金を持ち寄り、使徒たちの足もとに置き、その金は必要に応じて、おのおのに分配されたからであります。評判の良かったバルナバをその中の一人として代表させています。ここに見るキリストによる平等の社会をパウロは言います。「アダムの罪によって人類が有罪とされた。しかし、イエス・キリストの正しい行為によって、人類が義とされた（ロマ5：18）」人が人を支配したユダヤの王国とは違う、人が人に仕える初代教会の姿を伝えております。

6. わたしたちへの振り返り

土地は本来、神が授けて下さったもの、その実りは神の祝福。しかし、わたしたちの私欲のためだけに用いれば、人間の不平等、争い、ひいては戦争に現れます。それは、司馬遼太郎がいう土地の投機の現実があります。見捨てられた土地があることはその裏返しで同じことです。それでは、わたしたちは天国に迎えていただけません。イエスは言われます。「富は、天に積みなさい。・・・あなたの富のあるところに、あなたの心もある」大切なのは心の問題です。あの初代キリスト教会にはバルナバのように福音伝道に、貧しい者に施す人がいた。今、世界でも日本で支援を必要としている弱い立場の人たちがいます。イエスはそのような人にわたしたちが目を向けるように促しています。そこには神の祝福と大きな喜びが約束されます。